

長岡京漢詩作詩研修会

令和二年十一月発行第十五号

古
京
風
韻

古京風韻 第十五号 目次

一、漢詩作詩研修会 古京風韻 第十五号発行に寄せて 伊藤鉄雄

二、漢詩集

晚春憂新型肺炎流行
夏日保津川舟行

初夏即事

園部城跡

雄琴早春

初夏雨

陽光櫻植樹祭

梅雨晴

登華山

祝真象書展

出梅偶感

秋夜偶感

露草

秋日偶成

餓春

伊藤鉄雄

伊藤鉄雄

石澤賀笙翠

今西進

今西進

入谷君子

鶴野高資

鶴野高資

加賀山尚子

加賀山尚子

加藤初枝

川勝芳三

川勝芳三

川勝芳三

久保正鳳

小林清夫

小林享江

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
----	----	----	----	----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---

惜春絶句

京都岡崎花回廊

糺の森（下鴨神社）

故郷安住感懷

沈丁花（瑞香）

木芙蓉

夏日雜詠

訪奥琵琶湖

訪那谷寺

詠四季風光

登天王山吟詠

老松感懷

西山浅春

祝太鼓山元氣俱楽部

思明智光秀

伽羅奢祭

初夏偶吟

坂本敏一

櫻井登志子

立林好栄

玉岡瞳

中川岩雄

玉岡瞳

橋本孝司

橋本孝司

長谷川功

福岡太郎

福岡太郎

藤田忠

林克宏

福岡太郎

福岡太郎

藤田忠

前田正子

高野參詣

西山夕景

千里旅情

節句偶成

同門新年会

太平洋上眺日没

祝金剛山登頂五千回

水木静爽

山際和子

山科三千代

山科三千代

脇海道總子

和田敦子

- 三、漢詩作詩研修会の歩み活動報告

四、編集後記

長岡京漢詩作詩研修会 「古京風韻」 第十五号発行に寄せて

長岡京漢詩作詩研修会 代表 伊藤 鉄雄

早いもので今年も古京風韻の発行の時期となりました。

会員の皆様には日頃の活動に御協力いただきありがとうございます。

今年は、新型コロナウイルスの影響で六月の初心者研修会、九月の外部講師予定の研修会及び十月の「市民文化まつり」の漢詩作品展示等の多くの活動が中止となりました。

来年は、コロナウイルスが終息することを願っていますが、なかなか厳しい状況です。

尚、今回の古京風韻は二首投稿の方もあり、一十七名の方が三十九首投稿され、皆様の漢詩作詩に対する熱意で、ここに第十五号が出版され感謝にたえません。

来年は、今年を上回る投稿を期待しておりますので宜しくお願ひします。

又、活動への参加者を増加する為に、お知りあいで興味のある方々へのPRもお願いします。

最後になりますが、今後とも日頃の研修成果を發揮していただき、四季それぞれに変わる自然の風光、その中にあって、日々の心の動き等を表現した素晴らしい漢詩が出来ますことを、ご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

晚春憂新型肺炎流行

伊藤 鉄雄

東郊飄泊暮煙横

とうこう ひょうはく
東郊に飄泊して暮煙横たわり、

兀兀傷心萬感生

こつこつ しょうしん ばんかんじょう
兀兀傷心万感生ず。

惱殺啼鶯春已去

のうきつ ていけん はるすで さ
惱殺す啼鶯春已に去り、

蔓延疫病亦無情

まんえん えきびよう またむじょう
蔓延の疫病亦無情。

(訳文)

東の町はずれをさまよい暮のかすみが横たわり、

愁いの傷心に多くのおもいが生ずる。

惱ます啼く杜鵑に春はすでに去り、

蔓延する疫病はまた无情である。

夏 日 保 津 川 舟 行

伊藤 鉄雄

保 津 溪 谷 避 炎 陽

ほづ けいこく えんよう さ
保津の渓谷 炎陽を避け、

熱 散 悠 然 仰 碧 蒼

ねつさん ゆうぜん
熱散じ 悠然として 碧蒼を仰ぐ。

爽 氣 櫓 聲 流 水 畔

そう き ろせい りゅうすい ほとり
爽氣 櫓声 流水の畔、

扁 舟 白 日 去 追 涼

へんしゅう はくじつ さ りょう お
扁舟 白日 去つて涼を追う。

(訳文)

保津川渓谷にあつい陽を避け、

熱さが散じて悠然として青空を仰ぐ。

爽やかな気のある櫓の音のする流水の畔に、
小舟が真昼に去つて涼を追う。

初夏即事

石澤賀笙翠

薰風拂拂覺清涼

雨霽幽居白鷺翔

くんぶう
ふつふつ
せいりょう
おぼ
薰風拂拂として清涼を覺ゆ、

あめは
ゆうきよ
はくろか
雨霽れ幽居白鷺翔ける。

嫩綠鮮芳閑煮茗

どんりょく
せんぼう
しゃ
めい
に
嫩綠鮮芳閑かに茗を煮る、

馳心碁戰坐林莊

こころ
は
きせん
りんそう
ざ
心を馳す碁戰林莊に坐す。

(訳文)

初夏に相応し涼しさを感じ、

雨あがりの静かな住まいに白鷺が飛び回る。
若い葉っぱにかんばしい茶をすすりながら、
林莊で囲碁に熱中しています。

園部城跡

今西進

綠濃古跡帶朝陽

りょくのう こせき ちょうよう
綠濃の古跡 朝陽を帶び、

巽櫓城門雲外揚

そんろじょうもん うんがい よう
巽櫓城門 雲外に揚たり。

榮位學園生俊穎

えいい がくえん しゅんえい う
榮位の学園 俊穎を生み、

百三十歳感無量

ひゃくさんじゅうさい かんむりょう
百三十歳 感無量なり。

(訳文)

綠濃き古城に朝日がさし

巽櫓の城門は雲の上に聳えていてます。

栄華の学園からは多くの才人を世に生み出し、
その百三十余年の歳月に感無量です。

雄琴早春

今西進

湖西萬里雨餘辰

湖西万里雨余の辰、

岸柳蘆搖畫筆親

岸の柳 芦揺れて 画筆親しむ。

盟友入寓催酒宴

盟友 寓に入りて 酒宴を催し、

歡談不盡醉湖春

歡談 尽きず 湖春に酔う。

(訳文)

琵琶湖西岸（雄琴）に立ち四方を眺めている内に雨もあがりました、
岸の柳や芦は風に揺れ、絵筆をとりました。

盟友と宿に入り酒宴を催し、

歓談尽きず湖春を楽しみました。

初夏雨

入谷君子

送春郊外鬱陰陰

春を送りて郊外鬱として陰々たり、

雲捲炎煙值雨淋

雲は炎煙を捲き雨淋に值う。

竹裏枝飛如有淚

竹裏枝飛び涙有るが如し、

翠然筍影暮愁深

翠然たる筍影暮愁深し。

(訳文)

春も過ぎ町はずれの野にうつとうしく、ものかなしく感じられ、

雲は暑くるしさを取り込んで雨模様となつた。

竹やぶの葉がひらひらとひるがえるのは丁度涙をしとしとと流すようで、緑一っぱいのだけのこのおおう姿は夕暮れにかかり心が一層ひかれます。

陽光櫻植樹祭

鵜野 高資

訪來緬甸倚蒼穹

訪ね来る緬甸蒼穹に倚り、

今始陽光植樹叢

今始まる陽光植樹の叢。

永劫鎮魂鴻鵠計

永劫の鎮魂鴻鵠の計、

両邦友好協和風

両邦の友好協和の風。

(訳文)

訪ね來たったミャンマーは一面の青空です、

今から陽光桜の第十回植樹祭が始まります。

過去の戦争に空しく散った、魂を弔う鴻鵠の計らいです、

両国の友好は仲よく力を合わせて育てていきましょう。

(令和二年一月二十日の植樹祭には、NPO京おとくに街おこしネットワークより九名が参加しました)

登華山

鵜野 高資

蒼旻盈溢覆懸崖

蒼旻盈溢懸崖を覆う、

天下矜誇第一佳

天下に矜誇第一の佳。

眼界四望驚駭峻

眼界四望すれば驚駭の峻、

今將臨瞰北峰牌

今將に臨瞰す北方の牌。

(訳文)

青空が切りたつた崖を覆っています、

ここは天下に誇る美しき名景です。

見渡すかぎり驚くべきけわしさで、

今まさに北峰の札を見おろしています。

華山は五岳の一つ（西岳）陝西省秦嶺山脈の高峰、私にとりまして中国十九回めの企画主催旅行です。
令和元年十月十九日北峰をロープウェイで登つてきました。

梅雨晴

加賀山 尚子

數竿緩緩長龍孫

数竿緩緩たり 龍孫を長す、

細雨淡烟晝尚昏

細雨淡烟たり 昼尚昏し。

俄頃安閑不欲出

俄頃 安閑として 出づるを欲せず、

雨餘碧苔坐幽軒

雨余の碧苔 幽軒に坐す。

(訳文)

竹林の枝はのびてたれ下がり、竹の子が伸びています、細雨降り続き淡烟の光景が広がり、昼とはいえ暗いです。しばらくの間、気楽にのんびりとこの地にとどまりたく、雨あがりの青苔に魅せられて静かな軒端に坐しています。

祝 真象書展

加藤 初恵

文林八月雅風聲

ぶんりん はちがつ がふう こえ
文林の八月 雅風の聲、

真象相親六藝盟

しんしょう あいした
真象 相親しむ 六芸の盟。

個展悠悠幹藻満

こてん ゆうゆう かんそうみ
個展 悠々 幹藻満ちる、

揮毫筆跡濯塵纓

きこう ひっせき じんえい あら
揮毫 筆跡 塵纓を濯う。

(訳文)

藝術の八月 雅な雰囲気に包まれ、
書友である真象さんは六芸に親しみ、
この度、立派な個展を開催され、その才能が溢れています。
揮毫筆跡は見事に世俗を超えたかのように素晴らしい 本当におめでとうございます。

出梅偶感

川勝芳三

梅霖漸霽綠陰新

梅霖漸く霽れ 緑陰新たに、

朝歩小庭蟬噪頻

朝小庭を歩めば 蟬噪頻りなり。

歲月空過身健在

歳月空しく過ぎるも 身は健在にして、

薰風拂拂滌炎塵

薰風拂拂として 炎塵を滌う。

(訳文)

長かった梅雨が漸く晴れて真夏が今年もやつてきた、

庭では蟬の声が騒がしい。

又一年真夏を迎えて健在にして感謝、

どこからか涼しい風が吹いてきて心のもやもやを滌れる。

秋夜偶感

川勝芳三

金風簫瑟月光寒

きんぶう
しゃうしつ
げつこうさむ
金風簫瑟月光寒く、

玉露盈庭落葉攢

ぎょくろ
にわ
み
玉露庭に盈ちて落葉攢まる。

霜鬢又増衰老赴

そうひん
またま
霜鬢又増し衰老赴くを、

殘生果得幾回歡

ざんしょう
は
いくかい
かん
え
残生果たして幾回の歎を得んや。

(訳文)

月の光寒く寂しさがしみじみと感じる、
庭には落ち葉の上に露が満ちてる。

白頭さらに進み身体の老化も一段と増す、

残り少ない人生、果たして幾回か此の場面を見て、愉しむ事が出来るかな。

露草

久保正鳳

避暑早朝來菜圃

暑を避けて早朝菜圃に來り、

茂生露草小花青

茂生す露草小花青し。

被芟心境貴知否

芟か被心境貴知る否や、

一束入壺留我亭

一束壺に入れて我が亭に留めん。

(訳文)

暑さを避けて早朝に畠に来ました。
畠にはツユクサが青い花を咲かせて群生しています。
これを刈り取る辛い心境を貴女は知らないでしよう、
一束壺に入れて我が家で育ててあげようかと思ひます。

秋日偶成

小林 清夫

天晴秋色送年華

てんは しゅうしき ねんか おく
天晴れ 秋色 年華を送る、

夕暮紅陽今且斜

せきば こうよう いままさ なな
夕暮 紅陽 今且に斜めならんとす。

逝水不留流似老

せいすい とど
逝水 留まらず 流れ老に似たり、

晚來白髮對殘花

ばんらい はくはつ ざんか たい
晩来 白髮 残花に對す。

(訳文)

晴天の秋景色に時を忘れて、

夕暮れのお陽さんが今西に沈もうとしています。

逝く水は止まること丁度老いてゆくわが身といつしょ、
くればただ眺めている年寄りが。

餞 春

小林 享江

朱杏粧成薰邇圃

朱杏粧成り 邇き圃に薰す、

白櫻染出搖遙空

白櫻染め出で 遙空に搖ぐ。

唯惄風吹雨淋漣

唯惄る 風吹き 雨淋漣たり、

花謝愁來春晚中

花謝し 愁來たる 春晚の中。

(訳文)

赤いあんずが美しく近い烟ににおつてゐる、
白い桜が咲きはるかな空に色どりをそえていてます。
ただ恐れることは風が吹き雨が無情にふれば、
美しい花はちり愁いがこみあげる春の夕ぐれをわたくしはながめています。

惜春絶句

坂本敏一

菲菲香雪落花頻

ひひ
こうせつ
らっかしきり
菲菲たる香雪落花頻なり、

芳事闌殘奈晚春

ほうじ
らんざん
ばんしゅん
いかん
芳事闌殘晚春を奈せん。

逝水年華留不得

せいすい
ねんが
とど
え
逝水年華留め得ず、

傷心一脈白頭人

しょうしん
いちみやく
はくとう
ひと
傷心一脈白頭の人。

(訳文)

落ちる花びらはまるで乱れ舞う雪のようで頻りなり、
香しい爛残の春は如何とも難く過ぎ去つて行く。

流れ去る川の水と年月は留めることもできないように、
去り逝くのどかな春に心がいたむ我が老いの身に。

京都岡崎花回廊

櫻井 登志子

琵湖疏水美觀邊

琵湖の疏水美觀の辺、

神殿鳥居朱闕妍

神殿の鳥居朱闕妍なり。

天地爛漫花満堤

天地爛漫花堤に満ち、

舟遊遙見洛東巔

舟遊遙に見る洛東の巔。

(訳文)

琵琶湖から水を引いている疏水の辺は、美しい回廊です。

平安神宮の鳥居と堤の大樹の桜が滝のように、川面になだれた、対比の色。

夷川の噴水を、引き返すと正面に東山の嶺を望み清々しい景色の文化ゾーンである。

令和二年四月五日

糺の森（下鴨神社）

櫻井 登志子

森 森 史 跡 滌 詩 魂

森々たる史跡 詩魂を滌う、

閑 砌 逍 遙 淨 六 根

閑砌逍遙すれば 六根を淨む。

清 畵 流 泉 雙 鴨 泳

清昼の 流泉 双鴨泳ず、

薰 風 漾 緑 別 乾 坤

薰風 緑を漾わして 別乾坤。

（訳文）

鬱 そとと緑が茂った、糺の森は、詩心を滌ってくれる。

清閑な時を感じながら、さまよえば、人生の迷いを淨めてくれるようだ。

清らかな昼。泉川に双鴨が遊び泳いでいる。

爽やかな薰風が、緑の香りを漂わして まるで別天地に居るようだ。

令和二年

故郷 安住 感懷

立林 好栄

人老家郷懐舊生

人 ひと 家郷 かきょう に老おいて 懐旧生かいきゅうしようじ、

裏山住宅俗縁軽

裏山の住宅 うらやま 俗縁軽じゅうえんかるし。

時移物変縱横道

時移り ときうつ 物變わりて 縱横道じゅうおうどう、

安住歲寒家族情

安住の歲寒 あんじゅう 家族の情かぞく じょう。

(訳文)

私は長岡京の此の地に生まれ住み、時々昔の風景を思い出し懐かしく思います。

裏山に新しい住宅地が開発されました。まだ余り深い御付き合いは有りません。

最近わが家の近くに、新しい時代と共に京都徳賀道路の高架道が開通しました。

今はわが子の家族と一緒に、年老いた私は、安らかに暮しています。

令和二年五月

沈丁花（瑞香）

玉岡瞳

異常寒冷月旬侵

いじょう
かんれい
げつじゅんおか
異常の寒冷
月旬侵し、

庭裏雪華丁字濱

ていり
せつか
ちょうじ
ほとり
庭裏の雪華
丁字の濱。

萬蕾比披香氣吐

まん
つぼみ
ならび
ひら
万の蕾
比て披き
香氣吐く、

欣然相對待春心

きんぜん
あいたい
たいしゅん
こころ
欣然として
相対す
待春の心。

（訳文）

立春が過ぎ啓蟄がすんでも嚴冬のような寒さの日々、
庭に舞う雪花は沈丁香のそばにも降りつづく。

ふと強い香りにひかれ見ると沈丁花が残雪の下で蕾がならびて開きかけていた、
それを見た時寒さも忘れよろこびが春を待つ心となつた。

木芙蓉

玉岡瞳

立秋過暦爽風遲

立秋暦を過ぎるも爽風遲し、

季定芙蓉秀萼披

季定まつて芙蓉秀萼披く。

朝婉夕凋花一日

朝に婉しく夕に凋む花一日、

人生如露欲矜持

人生露の如し矜持ならんと欲す。

(訳文)

暦の上の立秋ではあるが殊の外残暑厳しく爽風はまだ先のようだ、
しかし自然界は近づく秋を感じ芙蓉が優美な花をひらいてきた。

朝はしとやかで美しい花も夕方には凋んでしまう一日だけの花である、
人生も又露のように僅く消える命であることを、自覚して誇りをもつて生きたいと思う。

夏日雜詠

中川 岩雄

蓮花雨潤起涼颸

蓮花雨潤て涼颸起^{アメウラルオウ}_{リョウシオ}、

雨後西方雲散遲

雨後の西方雲散^{ウコ}_{セイハウ}_{クモサン}ずること遅^{オモ}_{オモシ}し。

山徑忽然蟬噪激

山徑忽然として蟬噪^{サンケイ}_{コツゼン}_{センソウハゲ}激^{オモシ}_{オモシ}し、

留連坐處更堪思

留連坐する処更に思うに堪えたり。
りゅうれん ざ ところ さら おもた

(訳文)

蓮の花が雨に濡れて涼しい風が吹いてきた、
雨上がりの西方は雲がゆっくりと流れている。
突然山の方より蟬の声が激しく聞こえてくる、
去るにしのびず縁側に坐し一層夏に相応しく思いがつのった。

訪奥琵琶湖

橋本孝司

吟朋相集奥湖邊

吟朋相集い 奥湖の辺り、

四面風光春色鮮

四面の風光 春色鮮やかに。

舞散桜花當如雪

舞散る桜花 當に雪の如く、

行人嬉嬉弄詩箋

行人嬉々として 詩箋を弄す。

(訳文)

昨年、吟友が集まり、奥琵琶湖の桜を見に行きました。

四方の風景は、すっかり春の光りに鮮やかに映じ、遠くの山は煙り、春独特の風景。岸辺の舞い散る桜花は、當に降る雪の如し、美しさの中に愁いあり。観光の私も、あまりの美しさに、詩箋を開き書きとじめました。

訪那谷寺

橋本 孝司

薰風一路白山邊

薰風一路白山の邊、

新綠樹苔詩興牽

新綠の樹苔詩興牽く。

敬愛自然千古智

敬愛す自然千古の智、

奇岩靈窟氣如仙

奇岩靈窟氣仙の如し。

(訳文)

昨年の初夏に機会あつて那谷寺を訪ねました。

境内は静寂に包まれ、新緑の樹木と一面に広がる美しい苔。詩に詠じたいような風景。

この寺は十三〇〇余年の歴史があり、白山を信仰し自然を大切にする「自然智」の寺です。山肌を削ったような崖「奇岩遊仙境」は私自身が仙人になったような気がしました。

令和二年三月七日 作

詠四季風光

長谷川 功

雪解春信草初肥

雪解け春信草初めて肥る、

暑熱白雲天地晞

暑熱白雲天地晞き。

秋氣碧空夜清月

秋氣碧空夜は清月、

峭寒田舎電灯微

峭寒の田舎電灯微なり。

(訳文)

雪解けて春光 暖かく 草も漸く芽吹き始める。

暑い夏の白雲の天は、天地が乾くような暑さだ。

秋の晴れた日は、青空が広がり、夜は清い月が浮かぶ。

冬の厳しい寒さの田舎では、電燈の明かりが、微かに、心温まる。

令和二年一月七日

登天王山吟詠

福岡 太郎

登陟山頭望古京

登陟す 山頭 古京を望めば、

時移物変故園情

時移り物變るも 故園の情。

四通八達交流路

四通八達 交流の道、

忘老歲寒正氣清

老いを忘れ 歲寒 生氣清し。

(訳文)

久しく洛西の天王山に登り、古京長岡京市を望みました。

時代が移り風景も変わつて来ていますが、やはり故郷の様な気分になる。

彼方此方に通じる高速道路できて、文化や経済の交流が盛んに。

自身の高齢も忘れて、美しく新しい天地を暫し眺め生気が湧きました。

令和二年五月

老松感懷

福岡 太郎

安住 長岡 茅屋天

安住 長岡 茅屋の天、

四時花木築山邊

四時の花木 築山の邊。

老松生氣堂堂景

老松の生氣 堂堂の景、

想見歲寒倣自然

想い見る 歲寒 自然に倣わん。

(訳文)

古都、長岡京市に御縁が有り、茅屋に安住しています。

四季の花や木が植えてある、小さな庭が有ります。

古い松の木が、四方に枝を広げ、堂々として生氣を感じます。

私も年老いて、生きてる限り気力を以て、元気で居たい。

令和二年一月

西山浅春

林克宏

芳信探遊野興加

芳信探遊すれば野興加わり、

寒村雪後水流涯

寒村の雪後水流の涯。

廻渓二月春猶淺

渓を廻る二月春猶浅し、

馥郁清香福寿花

馥郁たる清香福寿の花。

(訳文)

花の便りを求めて歩きまわれば、早春の野趣も加わり、長岡京の西山の寒村には残雪があり、雪解け水が流れている。渓を巡り歩けば、二月の春は浅く、未だ寒い。馥郁とした香りを送ってくれる福寿草にやつと会えました。

令和二年三月

祝太鼓山元気俱楽部

林 克宏

星移季過七周年

星移り季過て七周年、

會友相携志益堅

会友相携えて志益堅し。

律動四肢流室内

律動す四肢室内に流る、

回春生氣樂陶然

回春の生氣陶然として楽しむ。

(訳文)

歳月は 何れともなく 早く過ぎざり七周年を迎える。

会の皆さんのが手を携えて、会を盛り立てて行こうと言ふ気持ちは、ますます固い。律動(リズム)に合わせ、手足を動かし、室内一杯に流れるように動く。青春の時の様に、楽しみに酔い、生きてる限り元気で居たい。

思明智光秀

藤田忠

丹波領主敬黎民

丹波の領主
黎民に敬われ、

一夕謀図決断辛

一夕の謀図
決断辛し。

轉瞬興亡如夏夢

轉瞬の興亡
夏夢の如し、

名耶恨歎叛君人

名か恨か君に叛ける人。

(訳文)

時は戦国時代、光秀は信長の側近として丹波の領主に任じられ民から尊敬されていた。

突然「本能寺の変」、一夜にしての謀略は苦渋の決断であつただろう。

この政変は一瞬の興亡に終わり彼の三日天下は夏のはかない夢と空しく消えた。

彼の主君に叛いた本意は野望への名声か怨恨か今尚なぞとなつてゐる。

伽羅奢祭

藤田忠

故都例祭惠秋晴

故都の例祭
秋晴に惠まれ、

時代衣装覽古情

時代の衣装
覽古の情。

婚稼玉姫殊綺美

婚稼の玉姫
殊に綺美なり、

勝龍寺巷沸歡聲

勝龍寺の巷
歡聲に沸く。

(訳文)

故都長岡京市恒例のガラシャ祭が秋晴れに恵まれ挙行され、
古き時代の衣装行列は当時のおもかげをしのぶ情感がある。
光秀の娘玉の婚儀の姿はまことに美しくあでやかである、
この催して当地勝龍寺城付近は多くの観客の歓声にわきにぎわつた。

初夏偶吟

前田 正子

萬綠濃陰雨後天

まんりょく のういん うご てん
万綠濃陰雨後の天、

銜泥雙燕弄秧田

どろ ふく そうえん おうでん ろう
泥を銜む 双燕秧田を弄す。

窓紗風靡清涼下

そうさ ふうひ せいりょう もと
窓紗風靡す 清涼の下、

一椀新茶遣我禪

いちわん しんちゃ われ しゃか せ
一椀の新茶 我をして 禪に遣しむ。

(訳文)

緑が一段と鮮やかになつた雨あがり、

泥をくわえた雌雄の燕が田植えの終わつたばかりの田に飛んでいます。

カーテンが風に揺れる涼しい所で、

一服の新茶をいただき心が落ち着きました。

高野参詣

水木 静爽

炎炎夏日訪僧坊

えんえん
かじつ そうぼう たず
炎々たる夏日 僧坊を訪ぬ、

石磴深深四面涼

せきとう
せんしん
石磴は深々として 四面涼し。

開祖幽姿心似水

かいそ ゆうし こころみず に
開祖の幽姿 心水に似たり、

悠然靜坐世塵忘

ゆうぜん せいざ
悠然と静坐すれば 世塵を忘る。

(訳文)

今年の夏は特別な酷暑でしたがお盆の前に先祖の供養を兼ねて弘法大師が棲んで居られる高野山に参拝しました。境内に入ると石疊の道は苦むし人影も少なく静まりかえっていました。

奥の院にある大師の御影を前にして心が洗われる思いでした。

そして佛堂にて心静かにゆつたりと座すればすべての煩わしさを忘れるひとときでした。

西山夕景

山際和子

西風瑟瑟早涼生

西風瑟瑟として早涼生じ、

寂莫秋天半月清

寂寥たる秋天半月清し。

一抹鄉愁陽已落

一抹の郷愁陽已に落ち、

殘光紅映暮山橫

残光紅映じて暮山横たわる。

(訳文)

秋風が吹き、ついこの間までの暑さが、嘘の様に涼しくなってきた、夕暮れの寂しげな空には清らかな半月が浮かんでいます。

悠に西の彼方へ夕日は已に落ち、なんとなく郷愁の様な、感覚を覚える、わずかな残光が紅に映じ、西山の暮影が暗く横たわる。

千里旅情

山科三千代

千里同遊樂遠征

せんり どうゆう えんせい たの
千里 同遊 遠征を楽しむ、

雜事忘憂此閑行

ざつじ ぼうゆう こみ かんこう
雜事 忘憂し 此に閑行。

四方遙天渾碧海

しほう ようてん こんべき うみ
四方 遥天 渾碧の海、

光轉影遲風月情

こうてん かげおそ ふうげつ じょう
光転 影遲し 風月の情。

(訳文)

旅友達と三ヶ月の世界一周旅行です、

日常の雜事や煩わしさを忘れ、クルージングを楽しんでいます。

四方に広がる青空は遙か遠くまで続き、渾碧の海を眺めています、
三六〇度の水平線を追い大自然の風景に感動です。

節句偶成

山科三千代

韶華風軟暖初生

韶華の風軟らぎ 初めて暖を生ず、

綠橘薰香春色明

綠橘の薰香 春色明らかなり。

季女良縁期待望

季女良縁の待望を期す、

閑居房室奏鳴箏

閑かに房室に居わり 嘴箏を奏でる。

(訳文)

春の陽ざしに柔らかな風が初めて吹き、
飾った橘の香りが更に爽やかさをましています。
末の娘の婚期を迎えるを待ち望む今日この頃、
箏を奏でたりして静かに過ごしています。

同門新年会

脇海道聰子

無恙把杯庚子春

つゝがな　はい　と　かのえね　はる
恙無く杯を把る庚子の春、

初陽院落倚芳茵

しょうよう　いんらく　ほういん　よ
初陽院落芳茵に倚る。

師生相會閑和誼

しせい　あいかい　かんわ　よしみ
師生相会す閑和の誼、

互祝前途宴席陳

たがい　ぜんと　しゃく　えんせき　つら
互いに前途を祝し宴席を陳ねる。

(訳文)

穂やかに春のような暖かい日、
蠟梅の香りが心地よい静かな料亭で。
師を囲み楽しい一時を過ごしました、
これからの余生お互いに平安な日々でありますようにと。

太平洋上眺日没

和田 敦子

長途世界一周遊

長途世界一周の遊、

吾在船橋洗旅愁

吾は船橋に在りて 旅愁を洗う。

眼下潮流如雲海

眼下の潮流 雲海の如し、

夕陽將沒入双眸

夕陽 将に没まんとし 双眸に入る。

(訳文)

世界一周の長い船旅です、

船橋でゆつたりと旅愁をなぐさめています。

眼下の潮流はまるで雲海です、

真っ赤な太陽が今まさに沈もうとしています。

祝金剛山登頂五千回

和田 敦子

傳聞登頂五千回

伝え聞く登頂五千回と、

宿志達成眞樂哉

宿志の達成 真に樂しきかな。

山氣一天清淨境

山氣一天清淨の境、

仰觀藻景得詩媒

仰いで藻景を観て 詩媒を得たり。

(訳文)

友の金剛山登頂五千回達成を聞きました、
目標の達成は驚きで目出度いものです。
この山は清浄の感がみなぎり、
美しい名景は詩趣にあふれています。

長岡京漢詩作詩研修会の歩み活動報告

1. 研修会活動経緯及び研修内容

- ・吟道賀堂流長岡京吟詠会の有志によって立上げ
- ・第1回開催：平成15年5月24日
- ・研修内容：漢文の知識と漢詩のあじわい方、漢詩作詩の基礎、漢詩鑑賞、漢詩作詩の事例紹介と講評等

2. 漢詩作詩研修会開催履歴

回数	開催日	開催場所	参加人員
1	2003/5/24（土）	中央公民館1階レクリエーション室	45
2	2003/8/2（土）	産業文化会館3階2会議室	29
3	2003/11/30（日）	中央公民館1階レクリエーション室	37
4	2004/2/8（日）	婦人教育会館1階第5研修室	28
5	2004/5/22（土）	産業文化会館3階2会議室	39
6	2004/8/21（土）	産業文化会館3階第1、2会議室	32
7	2004/11/13（土）	婦人教育会館2階会議室	29
8	2005/2/20（日）	産業文化会館3階第1、2会議室	33
9	2005/5/3（祝日）	中央公民館2階講座室	25
10	2005/8/21（日）	中央公民館2階講座室	30
11	2005/11/19（土）	中央公民館2階講座室	22
12	2006/2/12（日）	産業文化会館3階第1、2会議室	28
13	2006/4/30（日）	中央公民館2階講座室	26
14	2006/8/19（土）	中央公民館2階講座室	21
15	2006/11/25（土）	中央公民館2階講座室	23
16	2007/2/4（日）	産業文化会館3階第1、2会議室	39
17	2007/5/20（日）	産業文化会館3階2会議室	28
18	2007/8/18（土）	中央公民館2階講座室	27
19	2007/11/4（日）	産業文化会館3階第1、2会議室	40
20	2008/3/9（日）	中央公民館2階学習室2	35
21	2008/7/13（日）	中央公民館2階学習室2	35
22	2008/11/23（日）	中央公民館2階学習室2	30

回数	開催日	開催場所	参加人員
23	2009/1/11 (日)	中央公民館 2階講座室	64
24	2009/3/8 (日)	中央公民館 2階講座室	55
25	2009/5/10 (日)	中央公民館 2階講座室	50
26	2009/7/5 (日)	中央公民館 2階講座室	49
27	2009/9/27 (日)	中央公民館 2階学習室2	36
28	2009/11/22 (日)	中央公民館 2階講座室	45
29	2010/3/7 (日)	中央公民館 2階講座室	37
30	2010/7/18 (日)	中央公民館 2階講座室	31
31	2010/11/28 (日)	産業文化会館 3階 第1、2会議室	22
32	2011/1/30 (日)	中央公民館 2階学習室2	25
33	2011/3/6 (日)	産業文化会館 3階 第1、2会議室	24
34	2011/5/1 (日)	中央公民館 2階講座室	22
35	2011/7/3 (日)	中央公民館 2階学習室2	35
36	2011/11/19 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	16
37	2012/1/29 (日)	中央公民館 2階学習室2	25
38	2012/3/25 (日)	中央公民館 2階学習室2	20
39	2012/7/29 (日)	中央公民館 2階講座室	38
40	2012/9/2 (日)	中央公民館 2階学習室2	17
41	2012/11/4 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	18
42	2013/1/13 (日)	中央公民館 2階視聴覚室	21
43	2013/3/24 (日)	中央公民館 2階学習室2	18
44	2013/7/28 (日)	中央公民館 2階講座室	40
45	2013/9/1 (日)	中央公民館 2階学習室2	14
46	2013/11/4 (月)	産業文化会館 3階 第1会議室	18
47	2014/1/19 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	16
48	2014/3/2 (日)	中央公民館 2階学習室2	14
49	2014/7/27 (日)	中央公民館 2階学習室2	26
50	2014/9/14 (日)	中央公民館 2階学習室2	16
51	2014/11/16 (日)	中央公民館 2階学習室2	12
52	2015/1/18 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	16
53	2015/3/7 (土)	産業文化会館 2階 第1会議室	19

回数	開催日	開催場所	参加人員
54	2015/7/26 (日)	中央公民館 2階講座室	28
55	2015/9/13 (日)	中央公民館 2階学習室 2	18
56	2015/11/3 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	16
57	2016/2/7 (日)	中央公民館 2階学習室 2	21
58	2016/7/18 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	25
59	2016/11/3 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	12
60	2017/2/5 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	15
61	2017/8/13 (日)	中央公民館 2階講座室	27
62	2017/11/3 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	7
63	2018/2/11 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	9
64	2018/8/11 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	20
65	2018/11/3 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	9
66	2019/2/10 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	13
67	2019/9/22 (日)	中央公民館 2階講座室	18
68	2020/2/2 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	10

3. 漢詩作詩初心者研修会開催履歴

回数	開催日	開催場所	参加人員
1	2007/4/15 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	30
2	2007/7/1 (日)	産業文化会館 3階 第1、2会議室	22
3	2008/1/13 (日)	中央公民館 2階学習室 2	28
4	2008/5/4 (日)	中央公民館 2階講座室	34
5	2008/9/28 (日)	中央公民館 2階講座室	24
6	2009/4/5 (日)	中央公民館 2階講座室	25
7	2009/10/4 (日)	中央公民館 2階学習室 2	13
8	2010/5/2 (日)	中央公民館 2階講座室	25
9	2010/9/19 (日)	中央公民館 2階講座室	9
10	2011/9/4 (日)	中央公民館 2階学習室 2	14
11	2012/5/3 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	14
12	2013/5/3 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	16
13	2014/5/3 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	11

回数	開催日	開催場所	参加人員
14	2015/5/4 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	12
15	2016/5/4 (祝日)	中央公民館 2階学習室2	17
16	2017/5/4 (祝日)	中央公民館 2階学習室2	12
17	2018/5/4 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	9
18	2019/6/9 (日)	中央公民館 2階学習室2	10

4. 特別活動

- (1)2005年3月：「吟詠・漢詩交流特別訪中団」（寧波・天台山・桂林を訪ねて）の企画主催（第2回目中友好漢詩交流会交流記念漢詩集も発行）
- (2)2006年9月：特別史跡旧閑谷学校积菜献詩応募（6首）及び10月28日积菜参加（4名）
- (3)2006年12月：漢詩集（古京風韻）の創刊号発行
- (4)2007年9月：当月より毎月、京都新聞の「乙訓文芸ひろば」に漢詩を掲載
- (5)2007年12月：漢詩集（古京風韻）の第二号発行
- (6)2008年4月：「吟詠・漢詩交流特別訪中団」（寧波漢詩交流と江南を巡る旅）の企画主催（長岡京市・寧波市友好都市締結25周年記念）
- (7)2008年6月：長岡京市文化協会教養生活部に加入
- (8)2008年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (9)2008年12月：漢詩集（古京風韻）の第三号発行
- (10)2009年1月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (11)2009年7月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (12)2009年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (13)2009年12月：漢詩集（古京風韻）の第四号発行
- (14)2010年1月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (15)2010年1月：文化講演会主催
- (16)2010年6月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (17)2010年8月：公民館ギャラリーに漢詩作品展示
- (18)2010年10月：「竹まつり」に漢詩作品展示
- (19)2010年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (20)2010年12月：漢詩集（古京風韻）の第五号発行
- (21)2011年2月：「第4回寧波漢詩交流会」（漢詩作品展示会も実施）

- (22) 2011年7月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (23) 2011年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (24) 2011年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (25) 2011年12月：漢詩集（古京風韻）の第六号発行
- (26) 2012年4、5月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (27) 2012年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (28) 2012年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (29) 2012年12月：漢詩集（古京風韻）の第七号発行
- (30) 2013年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (31) 2013年10月：中国旅行（湖南省と湖北省6日間）
- (32) 2013年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (33) 2013年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (34) 2013年12月：漢詩集（古京風韻）の第八号発行
- (35) 2014年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (36) 2014年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (37) 2014年10月：中国旅行（江西省5日間）
- (38) 2014年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (39) 2014年12月：漢詩集（古京風韻）の第九号発行
- (40) 2015年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (41) 2015年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (42) 2015年10月：中国旅行（河南省5日間）
- (43) 2015年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (44) 2015年12月：漢詩集（古京風韻）の第十号発行
- (45) 2016年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (46) 2016年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (47) 2016年12月：漢詩集（古京風韻）の第十一号発行
- (48) 2017年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (49) 2017年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (50) 2017年12月：漢詩集（古京風韻）の第十二号発行
- (51) 2018年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (52) 2018年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (53) 2018年12月：漢詩集（古京風韻）の第十三号発行
- (54) 2019年5月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示

- (55) 2019年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (56) 2019年12月：漢詩集（古京風韻）の第十四号発行
- (57) 2020年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (58) 2020年12月：漢詩集（古京風韻）の第十五号発行

編集後記

福岡賀秀泉

今年の古京風韻十五号も、長岡京漢詩作詩研修会の会員の皆様のご努力。ご協力のおかげで、例年の如く数多くの良い漢詩作品が集まり大変嬉しく思ひます。

漢詩は東洋文学の最高峰と言われる如く、七言絶句の二十八字。五言の二十字の漢字から成り崇高で読んで歯切れが良く又、漢字の深い意味、読むほどに含蓄があり、読む人に感動与える四行の起承転結の詩を誇りに思います。

各々の方の詩を読ませていただきても、大胆に、また繊細な詩心で作詩された漢詩。作者の個性を感じられるように思います。漢詩は上手、下手は余り有りません。気にならない方が良いと思います。

其の時の詩境の着想が作者に深く感じ捉えられた時は、素直に漢詩表現でき、良い詩が出来ると思いません。これも生涯学習です。楽しみの上には、苦しみも有ると、自己納得して、頑張りましょう。

幸いに、漢詩作詩研修会の皆さん、毎年、古京風韻を手渡しすると笑顔でお受け取りに成られることに安堵し、うれしくおもいます。

最後になりましたが、関係の諸先生方のご協力に感謝し又、印刷製本の京都市洛南障害者授産所の皆様に大変お世話になりました。誠に厚く感謝申しあげます。

令和二年十一月吉日

漢詩作詩研修会

相談役 小林清夫
代表 伊藤鉄雄

世話人 福岡太郎 川勝芳三

立林好栄

櫻井登志子

古京風韻編集委員会
編集員 伊藤鉄雄 福岡太郎

川勝芳三

表紙揮毫 山本保夫

